

# 名前と人生：楊逸『ワンちゃん』における 越境した苦労人ワンちゃん

李 雁 南

はじめに

- 一 楊逸の日本語文学
  - 二 王愛勤：ワンちゃんの中国人時代
  - 三 木村紅：ワンちゃんの越境
  - 四 ワンさんとワンちゃん：日本におけるワンちゃんの生活
  - 五 楊逸文学の特徴
- おわりに

## はじめに

近年来、外国人作家の日本語文学が注目を集めるようになってきた。詩歌の面ではアーサー・ビナードの『釣り上げては』『日本語ぼこりぼこり』や田原の『そうして岸が誕生した』『石の記憶』などがあり、小説の面では韓国の柳里美の『向日葵の柩』『家族シネマ』や李良枝の『由熙』、中国の楊逸の『ワンちゃん』『時が滲む朝』や温又柔の『好去好来の歌』『真ん中の子どもたち』、アメリカのリービ英雄の『星条旗の聞こえない部屋』『天安門』などがある。外国人作家の日本語創作は伝統的な「日本文学」の枠を破り、日本文学に新しい風を吹き込んだ。彼らは越境作家と呼ばれ、彼らの文学は越境文学と呼ばれている。

これら越境した作家によって創作された越境文学は越境した主体が日本という異空間の中で自分の民族的帰属や政治的追求や社会的アイデンティ

ティを見出し、自分自身を新しい現実の中で再構築する過程を描くのが主である。越境文学は多言語多文化の衝突と融合によって生まれた混血児で、母国に対する思慕と疎外が、異国に対する憧憬と違和感が同時に存在し、真ん中に生きる人間の辛酸を内在している。

その中で、1950年代以来、日本語で書く中国人作家は特に多かった。1950年代には台湾から日本に来た陳舜臣や日中混血児の邱永漢らがあり、1970年代には台湾の知識人、翻訳家の林文月や劉黎兒らがあり、1980年代以降は中国から日本に渡った蔣濮や黒孩らの留学生作家が登場し、さらに2000年以降は詩歌で有名な田原や芥川賞を受賞した楊逸らが登場した。中国の学者曹惠民がこれら日本で創作する中国人作家を「旅日作家」と名づけ、彼らの文学の内容を「日本想像」と「中国記憶」にわけてまとめた<sup>1)</sup>。

楊逸もこのような「旅日作家」の一人である。彼女の文学は越境文学の一部分で、日本に越境した中国人が日本という異空間における喜怒哀楽の物語である。

## 一 楊逸の日本語文学

楊逸は本名劉菽、1964年中国黒竜江省のハルビンに生まれ、幼少時代に中国の文化大革命（1966-1976）を体験した。中国に対する楊逸の記憶には家族と一緒に田舎に下放された辛い生活と文化大革命という政治の嵐と改革開放という時代の激変が影濃く投影された。1987年楊逸は日本に留学し、アルバイトをしながら言語学校に通い、1991年お茶の水女子大学に入学した。卒業後、中国語新聞社や中国語を教える教室で働いていた。このような体験は楊逸の目をその文学出発時において働くことによって生活を維持するごく普通の中国人移民に向かわせた。後、楊逸の文学に登場する中国人は殆ど普通の働く人々で、高邁な理想を持って大事業を日本で開拓しよ

---

1) 曹惠民：華人写作在日本，《常州工学院学报（社科版）》2007（6）を参照。

うとするような者はひとりもいなかった。それに、これらの登場人物は楊逸自身と同じように中国で激しい時代の変動を体験し、また同じように日本での辛い生活を体験した人物である。楊逸自身も「応募当時は中国語講師をしていたのですが、日中関係がぎくしゃくしてしまって生徒が減っていたんです。書く以外に取り柄もないし、日本で書くなら日本語だろうと。」<sup>2)</sup>と、日本語創作の動機について生活を維持するためだと率直に述べた。楊逸の越境体験には働くことが重みをなしたことははっきりしている。

2007年楊逸の初の日本語小説『ワンちゃん』は第105回文学界新人賞に入選し、さらに2008年1月の第138回芥川賞の候補作に選ばれた。残念なことに入賞できなかったのである。当時は「最終的に中身をとるか、日本語をとるかというところで選考委員の意見が分かれ、受賞には至らなかったのですが。」<sup>3)</sup>と、審査委員によって日本語の違和感を指摘されたことがある。同年6月、楊逸は『時が滲む朝』でとうとう第139回芥川賞を受賞した。楊逸はこれで歴史上初の芥川賞外国人受賞者となったのである。今回は選考委員の高樹のぶ子が「日本の文学そのものに刺激を与えるのだろうか、私は感じていますね。外部が存在するというのを強く意識するきっかけになるというか。」<sup>4)</sup>と楊逸の文学と伝統的な日本文学との差異を指摘し、楊逸文学における「中国」の存在を評価したのである。

このように楊逸は日本語で書く作家ではあるが、日本人作家との差異を最初に意識し、しかもその差異を売り看板に出して文壇に登場したのである。楊逸と日本人作家との違いはその作品の壮大な構想と違和感のある日本語表現と、質素な労働生活の中で異文化にぶつかっていく主人公の中国

---

2) 楊逸×シリル・ネザマフィ：私たちはなぜ日本語で書くのか、『文学界』2009年11月（第63巻第11号）、198頁。

3) 楊逸×高樹のぶ子：芥川賞受賞記念対談 国境を越えたから書けたこと、『文学界』2008年9月（第62巻第9号）、213頁。

4) 楊逸×高樹のぶ子：芥川賞受賞記念対談 国境を越えたから書けたこと、『文学界』2008年9月（第62巻第9号）、217頁。

人像にあるのではないかと考えられる。

芥川賞を受賞して以来、楊逸はずっと意欲的に新作を発表しつづけた。2007年のデビュー作『ワンちゃん』と2008年の芥川賞受賞作『時が滲む朝』のほか、2009年の『金魚生活』、2011年の『獅子頭』、2013年の『流転の魔女』、2014年の『あなたへの歌』など、作家としての楊逸の成長がはっきりと目に見えるものであった。素材の面では国境を越えて中国から日本に移住する中国人を主人公とし、中国人の日本体験を描いた。言語の面では中国語を母語とする中国人作家ならではのユニークなバイリンガルな日本語表現を駆使している。筋立の面では、私生活の些細なできごとにこだわったり現実と幻想の境目を彷徨ったりするような今日の日本人作家と違って運命の変わり目を中心に長い人生の流れを大河小説風に描いていた。楊逸は自分が「越境した文学者」と呼ばれ、自分の作品も「越境文学」と呼ばれることについて、「もし私の小説に中国人が出てこなかったら、たぶんみんなガッカリするだろうなと思いますよ。」<sup>5)</sup>と笑って、「中国」を自分の特色としていることと、自分の文学が中国的な日本語文学であることを誇りにしていると思われる。

確かに日本語で書く外国人作家なら、日本の編集者からも読者からも日本人作家との差異を最初から期待されるのも当たり前といえば当たり前だろう。そんな期待に応えるように、楊逸の文学は題名から素材や人物設定や筋立てや言葉遣いといったすべての面にわたって、「中国」という記号を目立たせようとしているのである。

楊逸がよく越境した中国人女性を描く。出世作の『ワンちゃん』において国際見合い結婚を通して田舎の日本人男性と結婚するワンちゃん、『老処女』において留学したあと大学の非常勤講師になる独身女性万時嬉、『金魚生活』において孫の世話をするために日本に来た玉玲ら、中国から日本

---

5) 楊逸×シリル・ネザマフィ：私たちはなぜ日本語で書くのか、『文学界』2009年11月（第63巻第11号）、201頁。

に来た女性たちを描いた。これらの中国人女性は越境した原因がそれぞれ違うが、日本に来て普通の生活をし、働きを通して日本でささやかな生計を立てることは同じである。また日本に来て、いつまでも祖国中国のことを忘れられず、異文化との出会いと衝突の中で自己成長を遂げずに越境の孤独に陥ったのである。その中でもデビュー作『ワンちゃん』における苦労人の越境者ワンちゃんは一番読者の心を打つ人物ではないかと思われる。

## 二 王愛勤：ワンちゃんの中国人時代

『ワンちゃん』のあらすじをまとめればこうなる。ワンちゃんは離婚した女性で、中国のある小さな町で服装の個人経営をしているが、女遊びに熱中する前夫は一人息子を育てるのを理由にいつも彼女にお金をせがむ。それに堪えられず、前夫のいる場所を逃げるために、国際見合い結婚を通して田舎の日本人男性木村と結婚して、日本に来ている。夫との間にほとんど交流らしい交流もなかった。姑がワンちゃんの唯一の話し相手である。その間、ワンちゃんは土村という八百屋さんにも心を動かされた。経済的な事情でワンちゃんは国際見合い結婚の仲介業をやりだし、村の日本人男性に中国人の農村女性を紹介したが、土村もついワンちゃんの紹介で呉菊花という女性を知り、結婚を決めた。呉菊花が日本に来た時、ワンちゃんの姑が病気で亡くなった。

ワンちゃんの名前からその苦労人としての人生をたどっていくことができる。

中国人であった時のワンちゃんの名前は「王愛勤」で、勤労好きという意味だった。「愛軍」と名付けられた兄は「高卒後人民解放軍に入って、約十年間の軍人生活を経て」<sup>6)</sup>、いま工商局の課長に出世し、「愛学」と名

6) 楊逸：『ワンちゃん』、文藝春秋、2008年、8頁。以後同作からの引用は頁だけを引用文の後につける。

付けられた姉は勉強がよくできるからある大手銀行の支店長になっている。「愛勤」と名付けられたワンちゃんだけが15歳の時からお母さんの職を継いで縫製工場で働くようになり、その後服装の個人経営者となった。男運に恵まれず結婚と離婚を経て、たくさんの人生の苦労を経験した。お母さんが「お前って本当に苦労が多いね、ごめんね、もっと良い名前をつけてやれば、ごめんね……」(7頁)と、「愛勤」という名をワンちゃんにつけたことをしきりに悔いている。

「王愛勤」は中国人時代のワンちゃんの人生を象徴している。15歳のワンちゃんが縫製工場における母の職を継ぐのは中国政府が経済一切を管理した時代に特有なことである。国営企業では子供が両親が定年後その職を継ぐのは当時のしきたりであった。日本人読者がここを読んでたぶんこんなことがあるかと不思議に思うのであろう。また18歳のワンちゃんが洋服の露店を出してお金を儲けたのも改革開放で長い間供給制限の時代を経て物質への中国人の渴望がいつになく噴出したからであった。時代の激変がそのまま「王愛勤」の人生に投影され、彼女を「愛勤」という名前の如く時代に翻弄させながら勤勉な人生をたどらせたのである。普通の日本人読者から見ればまだ中学校と高校にいるはずの年なのに、ワンちゃんはすでに一人前の働き者として自分の生活を自分で支えるようになった。青少年時代の労働の体験は「愛勤」という名前の如く、1970年代の中国を象徴し、また10代のワンちゃんの痛々しい青春の姿を映している。それは今の日本の若い人と全く異なったような別世界の人生であり、日本人読者に新鮮な刺激を与えるようなものであろう。

ワンちゃんは20歳の時に結婚したが、格好いい夫は怠け者でまともな仕事にもつかず、ワンちゃんは一人だけで服装の商売で生活を維持している。そのため、ワンちゃんが「一月のうち半月も一人で広州に行っては、たちの悪い卸商人を相手にしたり、鉄道の運輸部とあの手この手を尽くして交渉したり、商品をいかにして早く露店に出せるか必死の日々」(26頁)を送っていた。そんな生活が15年も続き、最後に夫と離婚し、お金も息子も彼に

取り上げられて、ワンちゃんは一人でお見合いで知らない日本人の相手と結婚して日本に赴く。「王愛勤」という名前を持っていたワンちゃんの前半の人生は本当に苦労ばかりの人生で、気が強いワンちゃんもさすがにこりごりになって、ほとんど逃亡の形で日本に行ったのである。

「王愛勤」のこの越境は別に日本という特定の国を目的としたものではなかった。一人息子を口実にしてしきりにお金をせがんでくる前夫に堪えられず、今までの人生を支える原動力を失ったあとの逃亡でしかなかった。彼女にとっておよそ前夫が付いてくることのできないところならどの国でもよかろう。そのうちたまたま日本人との国際見合い結婚の仲介に会って、「日本」という国を特に意識しないままいきなり結婚で日本に行くことを決めたのであろう。「どこか前夫に見つからないところ」(37頁)、「遠い、遠い、確実にあの人が行けないところ」(40頁)を見出そうとして、ワンちゃんがその「どこか」を偶然日本にただけである。この越境には慎重深い日本人にとって考えられない大胆さと粗末さが含まれている。大胆さから言えば大陸民族であり空間に対する執着のない中国人らしく、生活空間を中国から日本という異国に切り替えることをなんでもないように軽率に決めてしまう。粗末さから言えば理性的で綿密な思考を前提に行動する男性と違って、感性で動き、時にはヒステリックな衝動で人生の大事を決めがちな女性らしく、深く考えることなく、いきなり未知の越境と再婚を実施したのである。そして、この大胆な日本への越境によってワンちゃんは「王愛勤」の時代を終了させ、新しい空間で新しい生活を始めたのである。

ところで、名前によって運命が影響されるというのは中国の田舎の迷信である。楊逸が小説の中で特にこの田舎の迷信を誇張的に書いた。例えば、女の子ばかり生む家庭の女の子の名前は「領弟」(弟をつれてくる)などで、みんな「弟」がついてしまう。このような名前の付け方を通して、楊逸は日本人読者の好奇心をそそのかせる中国の迷信を誇張的な形で強調し、その異国趣味を満足させる。谷口幸代は「非母語話者の作家の場合、異言語

であることを意識しながら書くことが常に強いられる。』<sup>7)</sup>と指摘したが、楊逸自身も「日本人が読者という前提で最初の小説『ワンちゃん』を書きました」<sup>8)</sup>と述べている。『ワンちゃん』において中国的なものが故意的に書かれたことがはっきりしている。これはある意味から言えば「中国」を売り看板にした楊逸の文学に特有なことであろう。自分は中国人作家だから、中国らしいこと、日本と違うような中国的なことを書かなければならないと、楊逸が常に意識しているのであろう。彼女自身だけではなく、たぶん日本人読者も彼女に期待するのはこのどこか違うところだと思われる。日本人作家が書いたのと全く同じものになってしまうと、たぶん楊逸文学の存在意義がなくなるのではなかろうか。楊逸の文学は固有の日本文学に対する刺激であり、外部の存在であるからこそ、日本で評価され、その存在意義が認められているといえよう。

名前の迷信だけではなく、新婚早々夫と一緒に車の事故に遭って夫が死に、一人だけ無事だった李芳芳という女性は「剋夫命」（夫を剋する運命）を持つ女として描かれた。ここでも中国農村の迷信がわざわざ誇張されている。もちろん名前で運命が影響されるという迷信も、夫に死なれた女の人を「剋夫命」と呼ぶという迷信も、たしかに昔の中国の農村にはあったが、しかし『ワンちゃん』という作品が創作されたのは2008年で、中国は改革開放からすでに30年近く経って、経済の急速な発展とともに、「思想解放」の思潮が国全体を席卷し、迷信のような田舎の古い土俗と文化大革命時代にあった政治的な雰囲気などはすでに一掃されてしまった時代であった。2008年の中国は都会と農村の差こそ大きかったが、農村の人が出稼ぎで都会に大勢出るにつれて、田舎の古い伝統などはだんだん忘れられていくようになった。それにも関わらず、「日本人が読者」という前提で、

---

7) 谷口幸代：楊逸の文学におけるハイブリッド性、『バイリンガルな日本語文化——多言語多文化のあいだ』、三元社、2013年。94-95頁。

8) 楊逸：留学、結婚、出産、そして天安門 新芥川賞作家、激動の半生を語る、『週刊文春』2008年8月7日（通号2489号）、131頁。



楊逸はわざわざ伝統的な迷信に縛られた中国を描いて、日本と異なる異国の存在感を大きくし、日本人にとってもっと親しみやすい古い中国の面影を描くことを通して、日本人読者の期待に沿うような中国像を巧みに作り上げたのである。

### 三 木村紅：ワンちゃんの越境

「王愛勤」の時代がワンちゃんの越境で終わり、日本の国籍に入る時、ワンちゃんは名前を「木村紅」に変えた。

「木村」は夫の苗字で、ワンちゃんは村の周りの日本人から「木村さん」と呼ばれる。「さん」づけの呼び方には尊敬と疎遠が同時に存在しているので、この「木村さん」という呼び方には二重の意味が含まれている。それは変な日本語をしゃべる外来者であるワンちゃんに対する村人の違和感の表れであり、また働き者で、国際見合い結婚の仲介で村の独身男性に中国人女性を紹介するワンちゃんの強さに対する敬服の気持ちもあるのではないかと考えられる。

小説の中に何回もワンちゃんのおかしい日本語が登場する。例えば、始まりのところに「ここよ、ここ、一つだけ、ホテル、ここ、来て、来て」（7頁）とお見合い相手の中国人農村女性に合わせるために、日本人男性たちを中国の田舎に連れて行く時、ワンちゃんの「下手な日本語」（7頁）が登場する。また日本人からホテルの布団が汚れているのを訴えられた時も、ワンちゃんは「ここは田舎、サービス悪い、しょうがないね。」（11頁）と、「変な日本語」（11頁）で説明する。「下手な日本語」「変な日本語」はワンちゃんの日本人との意思疎通に支障をもたらし、ワンちゃんを心の通い合える共同体である日本人という集団から外してしまった。そのせいもあって、ワンちゃんの日本における越境生活は孤独なものになり、無口の夫とも村の人々とも緊密なつながりができないままであった。

しかしその反面、村の男性たちがワンちゃんに連れられて中国に行く時、

唯一の頼りはこのワンちゃんの他愛ない日本語であった。お見合い相手の中国人女性の話がわからない時、ホテルの布団が汚れていて困る時など、日本人男性たちはワンちゃんに助けを求める。空間が日本から中国にすり替えられることによって、日本で周りの人から敬遠され、孤立させられたワンちゃんは今回は日本人の頼りになって、みんなから尊敬されるようになったのである。

それだけではなく、ワンちゃんに連れられて中国に来た日本人男性はみんな40歳を超えた田舎の人ばかりだ。日本人女性との結婚が難しい彼らは日本社会で周縁化された存在である。しかし、中国に来てお嫁を求める場合、「女性の人数はいつも男性の三、四倍という具合」(13頁)というふうに、日本で結婚難に困らされた田舎の日本人男性は重宝がられるようになる。このことはいうまでもなく彼らに日本で感じられない優越感を与えた。それはすべてワンちゃんのおかげで実現できたことである。この時のワンちゃんは日本人男性に人生の希望をもたらし、結婚難でコンプレックスを感じた彼らに自信を与える恩人に等しい。

たしかにワンちゃんがやっている国際見合い結婚は商売ではあるが、普通の商品の売買と違って、男女両方の人生を決めるような特殊なものである。そこには仲介人に対する利益の獲得を超えた感謝の気持ちがどうしても入ってしまう。ワンちゃんはこの見合い結婚の商売を通して、「木村さん」という「さん」づけの身分を確立し、日本人という共同体から尊敬され感謝される存在になったのである。

「木村」という苗字の後に「紅」という『『花子』』みたいにありふれている」「野暮ったい」(7頁)名前がついている。それはワンちゃんのお母さんが付けた名前で、「赤い色で厄除けになるんだから」(10頁)というお母さんの思いが込められている。ワンちゃん自身も「真っ赤な幸せな人生」(10頁)に対する期待をこの「紅」という名前に寄せていた。ところが事實はむしろその逆で、日本に越境したあとのワンちゃんの人生はけっして幸せなものではなかった。「波にまかせて生きている」(28頁)人生で、働くこ

とが好きだが頭を動かすのが苦手なワンちゃんの人生には「幸せ」という概念が成立したのはやはり中国時代の、前夫と新婚旅行で万里の長城に行った時、冷たい手を彼に握られた一刻だけであった。「これは私の一生だ、一生の幸せだ」（26頁）とワンちゃんはそれを「真剣かつ神聖な瞬間であった」（26頁）と覚えている。ほかの時はすべて苦労に占められた虚無的なものだけである。

「昔も今も、中国にしようとも日本にしようとも、うつろな目をして目的もなく町をブラブラしている。」（28頁）とあるように、日本に越境して、名前を「王愛勤」から「木村紅」に改めることはワンちゃんの人生に実質的な変化をもたらさなかった。当時日本に来る決心を付けた時、ワンちゃんが「過去と決別することができた」（41頁）と思い込んだが、実際、中国を逃げて日本に来ててもワンちゃんは依然として苦労人で、中国での服装商売をやめたが、やはり夫かだれかに頼るような楽な生活ができず、国際見合い結婚の仲介業で自分の生活を支えなければならない羽目に追い込まれてしまったのである。

忙しい肉体的な働きとは逆に、ワンちゃんは「うつろな目。からっぽな頭。孤立無援な気持。麻痺した神経」（29頁）を持っている。現実の次元で働きによって充実された体と、精神の次元で虚無に落とされた頭との対照によって、ワンちゃんという主人公は中国にいた昔も、日本に越境した今も、人間としての本質的な成長が見えず、ただ肉体的な働きだけで生の営みを支えていく者として描かれた。そんなワンちゃんは、平凡で単純な日常生活をしながら、精神的な世界をどこまでも探り、とりとめのない感情の世界に浸っていく今の日本人とは逆に、生活があまりにも充実すぎると同時に精神的な世界はあまりにも空白でありすぎるのである。今時の日本人と逆の人生を辿るワンちゃんこそ日本人読者には新鮮で魅力的な人物であろう。

「紅」という名前はワンちゃんの期待とは逆に皮肉な形で作品に登場した。ワンちゃんの心を動かした土村が国際見合い結婚をした時、土村の気

に入った中国人女性の呉菊花は赤いセーターを着ていた。そのためワンちゃんが呉菊花のことを「あの赤い人」(22頁)と呼んだ。「紅」という名前の中にかけられていた幸せへのワンちゃんの期待は結局、呉菊花というワンちゃんの働きで土村と縁ができて日本に来た人にすり替えられたような皮肉な形で実現されたのである。「牛の背中に真っ赤なゆったりめのチャイナドレスを着た呉菊花が、横向きに座っている。赤いベールを目深に被って、牛の揺れにしたがいベールの下から真っ赤な口紅を塗った唇がその姿を覗かせ、幸せが溢れんばかりの笑顔もチラリと見ることができる。」(69頁)これは土村と結婚式を挙げた時の呉菊花である。赤いチャイナドレスに赤いベール、それに真っ赤な口紅という赤い格好であった。この赤さはもともと「紅」という名前にかけられたワンちゃんの幸せに対する期待を象徴しているが、当のワンちゃん自身は赤い呉菊花を見てかえって「顔は真っ白になった」(69頁)。赤と白との対照を通して、楊逸はワンちゃんの悲劇を描きだしたのである。

呉菊花が日本にお嫁に来た日はちょうどワンちゃんの日本における唯一の親しい人である姑がなくなった日と重なった。ワンちゃんの編んだ赤いストールをつけて死んでいった姑と、ワンちゃんの幻想に浮かび上がる赤い唇をして「真っ赤なゆったりめのチャイナドレスを着て、牛の背中に横向きになって座っている呉菊花の姿」が、ともにワンちゃんの涙の珠に映って「赤い暈し」(77頁)となった時、「紅」という名前は呪いのように日本におけるワンちゃんの後半の人生にかけられていた。

中国では幸運の象徴で祝日や婚礼など喜ばしい時に使われる「赤」が日本という空間の中でその象徴的な意義を失って、皮肉な形でワンちゃんの人生に現れてきたのである。このアイロニカルな対照はワンちゃんの越境の失敗を物語り、苦労人であるワンちゃんの変えられない運命の象徴となっている。越境しても、名前を変えても、ワンちゃんの苦労は変わらないでいる。いわば、呉菊花がたぶんこれからワンちゃんの期待していた、土村という「大きな手をした力の強い男」(30頁)に支えられた人生を過

ごしていくのであろう。そのかわり、ワンちゃんの人生は依然として中国人であった時の「愛勤」の名前に象徴された苦労の続きである。名前の変化は人生の変化を意味することなく、「王愛勤」も「木村紅」も同じ苦労人にほかならなかった。

#### 四 ワンさんとワンちゃん：日本におけるワンちゃん的生活

「木村紅」と戸籍上に名前を変えたにも関わらず、夫の木村はワンちゃんのことを「ワンさん」と呼んでいる。「さん」づけは木村とワンちゃんの間隔な夫婦関係を象徴的に物語っている。

もともとワンちゃんが女癖の悪い前夫に懲りて今回こそ安心できる男を探そうと思って、無口で一見「女が引っ掛かりそうな要素はあまり見当たらなかった」（42頁）木村に心を決めたのであった。しかし、実際の婚姻生活に入ると、この日本人男性の無口は重たいものとなって二人の間に隔たりの溝を開けた。結婚生活が6年も過ぎて、「無口の旦那がいつしか無行動の旦那にもなった。」（44頁）ワンちゃんの日本に来たあとの生活は「さん」づけの呼び方に象徴された冷淡な夫婦関係に悩まされ、「紅」に象徴される喜ばしさと賑やかさとは縁遠いものであった。

夫だけではなく、夫の兄も毎日何もせずにテレビの前に居座るだけである。ワンちゃんだけが「毎日家事や料理などに励んでいる」（44頁）というふうな、妻と夫が両極端にいるような夫婦生活だった。そのうえ、ワンちゃんが住んでいるところも「交通の便が悪くて、近くに住宅も少な」（45頁）いようなところであった。周縁化された夫に周縁化された家、これはワンちゃんの日本における生活全体であり、ワンちゃんを生活臭のある本当の日本の現実から遠ざけ、異空間に越境した孤独を一層深めたのである。

夫から「ワンさん」と呼ばれるワンちゃんは、土村から「木村さん」と呼ばれた。勤勉で誠実な八百屋さんの土村こそワンちゃんが憧れた男性であった。「夫婦と一緒に商売をしている光景に、幾度憧れたかわからない。

なぜ自分はそれとは無縁な運命なのか。」(57-58頁)と、土村と一緒にお酒を飲むとワンちゃんは悲しくなる。彼女の憧れはあくまでも夫婦共働きである。中国にいた時、前夫がワンちゃんと結婚してからまもなく小学校教師の仕事を辞めてひたすらワンちゃんに頼るような生活を始めた。日本に来て、夫の木村は仕事は持っているものの、ワンちゃんと一緒に何かを経営する気は毛頭もなかった。しかしもう一方、土村はワンちゃんのことを「木村さん」と呼ぶ以上、ワンちゃんが既婚の女性であることを認め、二人の将来の可能性を否定したわけである。結局働き者のワンちゃんは中国にいた時も日本に来たあとも一人で頑張らなければならない運命であった。

「ワンさん」という呼び方に象徴された冷たい夫婦関係とは逆に、彼女は姑から「ワンちゃん」と親しく呼ばれた。「犬みたいな感じがして、嫌だと思ったこともあった。でもそのうち可愛くなってきて、退屈な日常の中で、『ワンちゃん』と呼ばれるだけで胸がじわじわ暖かくなるのを感じた。」(10頁)とあったように、「ワンちゃん」という呼び方から始まる姑との縁はワンちゃんの日本における生活の中でただ一つだけのぬくもりとなった。

ワンちゃんと姑は同じタイプの苦労人の女性である。姑は事故の後遺症で仕事を無くし、家でごろごろする長男に奉仕するだけで、自分が腰を痛めて入院する時その長男は一回も見舞いにこなかったにも関わらず、「孝一は大丈夫かろう？」(59頁)と息子のことを心配している。ワンちゃんの夫の木村も自分の母に対する労わりがなく、79歳の老母の病気を無視して無口と無関心で通そうとしている。姑は二人の息子からいささかの温情を感じ取ることもできなかった。かえって中国から来た嫁のワンちゃんは彼女の話し相手となり、彼女と一緒に家事をし、彼女が入院中看病をしてくれた。ワンちゃんは姑にとってただ一人だけの頼りになれるような人であった。

一方、ワンちゃん自身も不幸な女である。前夫と離婚したあともお金

をせがまれ、18歳になった息子も彼女にお金を要求するだけで彼女のためになにかしてあげると意識など全然なかった。「孤独と自己犠牲という二人の類似点」<sup>9)</sup>を持つワンちゃんと姑はお互いに依存し、冷たい生活の中でお互いにぬくもりを与えあった。ワンちゃんが国際電話代で無口な夫に怒られ、自立しなければならぬと考えて、国際結婚の仲介をやりだして、「日本語の壁」（63頁）にぶつかった時も、かわりに電話をかけて連絡をとってくれたのもこの姑であった。姑は夫の代わりにワンちゃんを可愛がり、「ワンちゃん」と呼んで、またワンちゃんの働きを支えてくれたのである。

しかし、ワンちゃんと姑の相互依存はワンちゃんの人生を広められるようなものではなかった。なぜかといえば、この姑自身も孤独な存在で、日本社会から周縁化された人間だからである。彼女はワンちゃんと外界との架け橋になることはできない。孤独者は一緒にさらに深い孤独の深淵に落ちるだけである。最後に姑が他界した。「真っ赤なストールを身にまとった姑が青々とした空に登っていく姿」（76頁）がワンちゃんの涙に濡れた目に浮かんで、ワンちゃんの心を痛めた。

「紅」の幸福な人生を他人にすり替えられ、唯一の親しい人で「ワンちゃん」と自分を呼んでくれる姑になくなられ、ワンちゃんの孤独がこれから一層深まっていくのであろう。

このように、王愛勤、木村紅、木村さん、ワンさん、ワンちゃんといった呼び方はそれぞれ中国時代のワンちゃんと日本時代のワンちゃんの人生の象徴であり、ワンちゃんの越境とその挫折を物語り、孤独な越境者ワンちゃんの映像をそのまま映し出している。それに、国際見合い結婚の仲介をするワンちゃんはこれからもっと多くの中国人女性を越境生活に引き込み、もっと多くの孤独な越境者を作り上げていくことが予想できよう。

---

9) 齊金英：楊逸「ワンちゃん」の〈逃避行〉——越境願望から痛みへの共感へ——、『国文』第116号、44頁。

## 五 楊逸文学の特徴

楊逸文学の特徴をまとめてみれば三つあると考えられる。

まず、楊逸文学は中国語式の日本語文学である。沼野充義が「楊逸の日本語は具体的にどこが『違う』のか？」<sup>10)</sup>を指摘したことがある。沼野がそれを中国語固有名詞の使用、中国語の簡単なフレーズや慣用句、故事、詩などの直接引用、現在の日本に稀になった漢語の散在、日本人があまり言わないような日本語表現の創造、及び中国人の自然観や生活感覚に即した比喩とまとめた。このような一般の日本語と違う言語表現によって、楊逸は自分の作品をまず形式上中国的にしたのである。それはいい面からいえば、日本語を単純な民族的な言葉からクレオールな国際語へと発展させる機会を作り上げた。固有表現以外の新しみを加えられることによって、日本語がもっと豊かな世界的な言語になる可能性が生じてくるのではないかと思われる。しかし、悪い面からいえば、中国語的な日本語表現は楊逸の文学が本当の意味における純文学になる妨げでもあろう。日本語で書かれた以上、狙いは無論日本人読者である。最初は楊逸の「違う」日本語表現が読者に新鮮な感じを与えて、彼らの猟奇的心理を満足させるかもしれないが、楊逸の作品が多く出るにつれて、この新鮮な感じがいつか必ず消えてしまうのであろう。その時に、読者はかえって期待が裏切られた不満を感じるのかもしれない。それに、中国的な表現が多すぎれば、読者の注意力が作品の言語表現ばかりに引きつけられ、その内容がかえって忘れられがちになる恐れも免れない。

次に楊逸の文学は題材過剰な文学である。文化大革命や天安門事件といった政治的な事件や、中国の土俗的な迷信などが主人公の人間像を政治

---

10) 沼野充義：新しい世界文学の場所へ——大きな楊文学についての小さな論、『文学界』2008年9月（第62巻第9号）、229頁。



的かつ文化的に広げる。また越境の体験も空間と文化をまたがって主人公たちの人生を彩った。このように楊逸の文学は私小説の伝統を汲んで個人の内面に目を向けがちな今日の日本文学と比べてみれば、空間的にも時間的にもまた政治と文化的にも書くべき内容が多すぎるような文学である。それは文化大革命と改革開放と日本留学などを身を以て体験した楊逸自身の経歴と割り切れないものである。しかし、このような多すぎる題材をどう処理するかは楊逸文学の大きな課題ではないかと思われる。楊逸自身も『時が滲む朝』で政治と関わりながら中国の民主主義運動に青春の熱血を注ぐ梁好遠や謝志強のような人物を書き上げたり、『ワンちゃん』で働き者の苦労人の女性を書いたり、『獅子頭』で孤独な越境者二順を書いたりして、もてあますように持っている素材をいろいろな形で整理し、作品に仕上げたのである。その間に楊逸の文学に対する姿勢調整があり、試行錯誤があると思われる。こういった調整や試練を経て、これからの楊逸の文学の行方は中国色の濃い風俗小説になるか、中国的なものを上手に内在させた真の純文学になるかのどちらかであろう。現在の状況から判断すれば、風俗小説になる可能性がかなり高いといわざるをえない。しかし、それは別に悪いこととも限らない。楊逸は純文学賞の芥川賞を受賞したにも関わらず、その文学出発時において原稿料で生活を維持するという経済上のもくろみがちゃんとあったことを彼女自身も認めているのである。楊逸はイラン人の留学生作家シリル・ネザマフィとの対談で、「私の場合は芸術的な動機というよりも、実際的な動機で、日本での生活をいかに発展させるか、という経済的な発想が主だったんです。作家を職業としたかったんですよ。」<sup>11)</sup>と述べたことがある。「経済的な発想」から考えれば、純文学よりもむしろ風俗小説のほうがもっと売れるのであろう。かつて原稿料で生活を維持した芥川龍之介は『地獄変』で現実の道徳と芸術の理想との相剋

---

11) 楊逸×シリル・ネザマフィ：私たちはなぜ日本語で書くのか、『文学界』2009年11月（第63巻第11号）、198頁。

について書いたことがあるが、楊逸の場合にもそのような悩みがあるのだろうか。それにしても、評論家が楊逸文学がもっと純文学の方向に向かうことを期待していると同時に、読者や出版社は楊逸文学の風俗化を楽しみにしているのではなかろうか。

最後に楊逸の文学は時代遅れの文学でもあると思われる。中国の目覚しい発展につれて、楊逸が体験していた文化大革命時代の中国と改革開放当初の貧しくて海外の事情に無知な中国はどんどん影薄くなる一方である。しかし、楊逸は改革開放が本格的に始まった時に既に日本に移民し、その後の30年あまりの間に人の目を見張らせるような変身ぶりを遂げた中国のことを身を以て体験することはなかった。日本に移住した楊逸はほかの日本人と同じように外部の視点から今の中国を眺めざるをえなくなったのである。こんな楊逸にとって、題材を日本に移民する前の中国体験に求めなければならないという必然性がある。そのため、楊逸の作品に登場する中国人も中国のこともほとんど時代遅れのものであり、中国をあまり知らない日本人読者に誤った情報を伝えることもありかねないと考えられる。楊逸の作品から中国のことを知った日本人読者がもし本当に中国に行ってみればびっくりして騙されたような感じがするかもしれない。もちろん、文学というものは今現在の時間の出来事を書かなければならないとは限らない。しかし、数十年前の中国のイメージをそのまま今現在の中国であるかのように描いた楊逸の作品にはやはり時代遅れの感じが免れない。いつまでも記憶だけに執着すれば、楊逸文学における中国像は停滞したものになってしまうおそれがある。

## おわりに

沼野充義は楊逸の文学を高く評価した。「彼女に比べると、ごく小さな私的圏域に視点を限定し、その中で恋愛と呼べるかどうかもわからない人間関係やとりとめのない感情の変化を追うことに集中しがちな現代日本の

多くの若手作家たちが、不幸な存在に見えてくる。彼らは楊逸とは対照的に、本当は書くべきものをあまり持っていないのではないかと、思えてしまうからだ。』<sup>12)</sup> いずれにしても、楊逸自身もいろいろな題材をいろいろな形で書いてきた。越境作家としての楊逸は一体どこまで成長していくのであろう。作家として豊かな題材といい素質を持っている楊逸はこれから時代遅れの中国像ばかりを作らずに、もっと広くて深い文学の世界に飛翔し、更なる大きな文学発展を遂げるよう心がけることを期待している。

2017年6月、台湾生まれ日本育ちの中国人作家温又柔<sup>13)</sup>の、異文化の間に挟まれる在日中国人二世の話を取り上げた作品『真ん中の子どもたち』は芥川賞の候補作に選ばれた。受賞こそできなかったが、候補の四作に入ったことだけでも十分意義があるといえよう。2008年1月、楊逸が『ワンちゃん』で芥川賞候補に入ってからほぼ10年ぶりである。こう見てみればこれからの日本文壇における中国人作家をはじめとする外国人作家の更なる活躍が期待できるものであろう。外国人作家の登場が本来の日本文学にとってどんな意味を持っているかが、これから大きな課題になることは予測できるものである。それは国家・民族・言語・文化の四位一体で固められた確固たる存在であった伝統的な日本文学にとって、まさに挑戦と脅威ではあるが、同時に日本文学が狭く限られた空間から脱出し、もっと大きな世界文学の大空に飛び立つ契機でもあるといえよう。

（華南師範大学外国言語文化学部教授）

---

12) 沼野充義：新しい世界文学の場所へ——大きな楊文学についての小さな論、『文学界』2008年9月（第62巻第9号）、227頁。

13) 温又柔（おん・ゆうじゅう）、1980年台湾生まれ、3歳の時に両親とともに日本に移住。留学生作家として活躍。代表作は『好去好来歌』（2009）、『来福の家』（2011）などがある。